

観光地における虚構性の研究

観光社会学からみた観光地の
「本物」「ニセモノ」論

小川 功

Isao Ogawa

跡見学園女子大学 / 教授
滋賀大学 / 名誉教授

I はじめに

国立歴史民俗博物館は平成27年3月、「『ニセモノ』と『ホンモノ』は非常に微妙な関係性の上に成り立っており、『明と暗』『黒と白』といった単純な二項対立的な説明では不可能な場合が多い¹⁾」との趣旨で様々な興味深い「ニセモノ」を展示した。観光の領域でも各地を旅行すると様々な「ニセモノ」に遭遇する。例えば現在では普通の地名となった感さもある「アルプス」「ライン」など、世界の名勝の「ニセモノ」は枚挙の暇がないほどである。後者は「大正の始め…地理学者故志賀重昂（矧川）氏太田に舟遊を試み、欧州ラインに比すべき勝景なりとし…日本ラインの称を附して激賞²⁾」したのが由来とされている。

伊豆・修善寺温泉の嵐山や埼玉県比企郡にある嵐山町など各地に模倣嵐山がある。前者は「桂川越に聳えませんが嵐山で、桜の名所…満山これ花の山、一目千本修善寺吉野を彷彿せしめます³⁾」と桂川沿いに渡月橋まで架かる嵐山という景勝地である。また伊豆の山中には上狩野村に「月ヶ瀬」なる炭酸泉が湧き、湯ヶ島温泉には「実際に西国還りをした様な気分が出⁴⁾」る「熊の山三十三番」のミニ霊場巡りもあり、観光客にあたかも嵐山・吉野・熊野など西国各地に遊ぶ気分を味合わせていた。湯ヶ島の嵯峨沢温泉も周辺が京都の嵯峨野に似た景観であることから、現に「伊豆の嵯峨

1) 10) 企画展示「大ニセモノ博覧会－贋造と模倣の文化史－」国立歴史民俗博物館、平成27年3月、p3

2) 『ライン探勝案内』美濃太田遊船、昭和2年以降、日本八景選定同時に発行

3) 芹沢天岳『伊豆の番頭』伊豆温泉名所案内所、p207

4) 前掲『伊豆の番頭』、p220

5) 『東武鉄道六十五年史』昭和39年、p212。ただし東武鉄道のサイト・武蔵嵐山駅のプロフィールでは「京都の嵐山に似ていることから、「武蔵嵐山」と呼ばれ、昭和10年「武蔵嵐山駅」と改称しました」と一致しない。

野」(伊豆市観光協会)と呼ばれるなど、現在に至るまでこの地の京・上方・西国方面への憧れは相当根強いものがあつたと考えられる。後者は昭和3年に訪れた本多静六が槻川が蛇行して比企丘陵を深く掘り込む風光明媚な景勝を京都の嵐山に見立て「武蔵国の嵐山」という意味で菅谷溪谷の名としたことに由来する。東武鉄道は観光客の増加を当て込み昭和10年10月1日菅谷駅を「東武嵐山駅」⁵⁾に改称したが、当時の菅谷村議会は大家の私見による模倣に納得せず、駅名を元の名に戻すよう要請した。しかし地元の異議にも関わらず、現駅名の武蔵嵐山の名が次第に定着、昭和42年4月町制施行により菅谷村は嵐山町と改名するに至った。私人の単なる印象が駅名に採用された結果、「本物」の町村名となり、歴史ある「菅谷」の名が廃され姿を消した例である。一方、本家の嵐山は区内に嵐山を冠する幾つかの町が存在する程度である。したがって地名上の格付けは「ニセモノ」の「らんざん」の方が、「本物」の「あらしやま」より格段に上位を占める逆転現象が起きている。

前々稿で筆者は「遠方の京都、伊勢、富士山などの社寺・霊山等への本格的な観光が様々な制約から実現困難な時期にも、地域の集団で「勧請」で近隣に末社を誘致し、末寺を建て、富士塚を築いた」⁶⁾と書いた。序論に引き続き、「本物」と「ニセモノ」が混然一体となって、見る者をいつしか非日常世界へと誘う観光現象における「真正性」と

「虚構性」の関係性・随伴性・連携性等のメカニズムについて解明するのが、近年の筆者の観光社会学の課題となっている。今回はこの延長線上に従前の「縮景庭園」⁷⁾や「写し霊場」⁸⁾、模倣地名論の先行研究⁹⁾を踏まえ、観光地そのものの虚構性と、模倣の背景となる社会現象を分析したい。歴博展では「ホンモノ」「ニセモノ」の対比だけでなく、『「ニセモノ」と『ホンモノ』との複雑な関係性が、時代や社会背景によって、どのような原理で振幅してきたのか』¹⁰⁾が問題とされた。本稿の観光領域でも「ホンモノ」「ニセモノ」間だけでなく「ニセモノ」同士の相互の諸関係や所在地域との関係性にも着目したい。

II 模倣地名の集積した模倣ゾーン

都市の成立という視点でみて、平城京は当時の日本が理想と考えた国際都市・唐の長安を模し、久仁京は洛陽、紫香楽宮は龍門をそれぞれ真似た都市計画とされるなど、古代以降の日本の都市計画は中国をお手本とした模倣都市の系譜が支配的であった。その後も江戸は一部京の都を模した地名・町割りを導入するなど、やはり模倣都市の考えに影響されてきた。また中世からは有力社寺の勧請、写し霊場、名所の縮景、見立による造園、風光の秀逸な名勝地の模倣地名(舞子、須磨、吉野等)など、各種の虚偽・虚構現象が続出した。

6) 前々稿・拙稿「観光における虚構性の研究—観光社会学の視点で捉えた『旅の疑似体験』」『彦根論叢』第403号、平成27年3月

7) 縮景とは庭園の題材・主題となる自然の風景や名所を箱庭のように縮小して再現する取景の造園技法で、中国の西湖、琵琶湖、松島、天橋立などの代表的な名勝地を模写縮小した象徴的な庭園をいう。代表的なものに広島市の縮景園などがあり、現代の東武ワールドスクウェアもこの系譜か。

8) 「本物」の「コピー」を意味する「写し霊場」とは長く故郷を離れる巡礼が可能なのは富裕層に限られ一般庶民にとっては夢であった当時、講による代参形式の考案とともに、全員が回れるよう西国あるいは四国などの巡礼に真似て考案され、近くに作った簡便な地方の霊場で、規模は国単位、郡単位、郷村単位とさまざま、中には一寺の境内に作られたものもある。古いものは鎌倉時代初期の坂東三十三所、室町時代の秩父三十四所等があるが、多くは四国遍路、西国巡礼が一般庶民に普及した江戸中期からブームとなった。

9) 鏡味明克「海岸観光地名の分布と変化」『愛知学院大学文学部紀要』第37号 p59~61(愛知学院大学学術紀要データベースkiyou.lib.agu.ac.jp/pdf/kiyou_01F/01__37F/01__37_59.pdf)

京都を模倣した「京都模倣都市」や、冒頭に見た嵐山等の名高い名勝地を模倣した「○○舞子」「○○耶馬溪」の類のほか、外国の模倣に関しても古くから中国の西湖等の景勝を模した庭園などが存在したが、近代になるとパリのエッフェル塔への憧憬を動機として浅草十二階¹¹⁾、新世界通天閣¹²⁾等西欧のランドマーク建築物に強い刺激を受けた模倣事例も出現した。

近代以前にも個々の模倣にとどまらず地域を挙げて面的なまとまりを有する以下のような模倣ゾーンさえ現れた。

①後白河法皇勸請による京都「三熊野」

京都にも熊野神社、新(いま)熊野神社、若王子神社という京の熊野三山、「三熊野」があり、若王子は熊野三山の那智大社にあたる。熱烈な熊野信者の後白河法皇は一生のうちに34回も熊野参詣したが、当時の都人が熊野に参ることは至難であった。熊野信仰が盛んで、天皇や上皇、公家などが紀州の熊野神社に詣でることがブームであった平安末期、憧れの熊野詣を近場で疑似体験するために熊野社の新宮・別宮として後白河の勸請により御所内に造営されたのが新熊野である。熊野の新宮・別宮たる鎮守社(=法皇邸の神棚)として新熊野神社が、鎮守寺(=法皇邸の仏壇)として三十三間堂がそれぞれ仙洞御所、法住寺殿内に創建された。法皇の命を受けた平清盛は造営に当り「故らに本山の土砂を運んで…樹木岩石に至るまで悉く之を熊野より移し来て境内に植ゑ」¹³⁾、本

物の熊野の砂や木々を用い、那智の浜の青白の小石を敷いて霊地熊野を厳かに再現したという。

②信者の老女が熊野三山を名取に勧請

本物同様に、熊野三社が地理的・方角的に同じ配置であるのは、全国に無数ある熊野神社のなかでも宮城県名取市の熊野三社(名取熊野本宮社、熊野那智神社、新宮社)だけである。仙台湾を熊野灘、名取川を熊野川、高館丘陵を熊野連山に模し、本宮、新宮、那智の三社が別々に勧請され、熊野の世界を「写し霊場」として「縮景」(縮小版)的に再現する勧請は東北における熊野信仰布教の一大拠点にふさわしい。なお、山形県南陽市の熊野大社も日本三熊野の一つに数えられ、昔から「東北のお伊勢さま」(南陽市観光協会)として多くの信仰を集めるなど、当地では伊勢と熊野が同一視されている。

③豪族が熊野を勧請、若一王子に由来の王子

中世の豪族・豊島氏は熊野勸請の手続きとして所領の一部を京都東山の熊野社の荘園として献納し、一帯を熊野の神域に見立て「紀州熊野の本社に模して、若一王子社を迎へ、幸ひの石神井溪流を紀州の音無川に見立て」¹⁴⁾「紀州の名をとって…音無川と呼ぶ」¹⁵⁾ほか、さらに音無川の南に新宮の摂社・飛鳥社(現阿須賀神社)を分霊し飛鳥山と改名した結果、「この辺一帯の地名に紀州まがひが随所にある」¹⁶⁾「ニセモノ」の熊野(現代のテーマパーク風というなら「熊野村」となり、熊野参詣の分社・若一王子社に由来する王子を正

11) 凌雲閣(浅草十二階)は越後長岡の生糸商・福原庄七が渡仏してエッフェル塔を見て「日本にもあれに模した高塔を造って登覧せしめたいといふ趣旨」(「東都名物十二階の爆破」大正12年9月23日『中央新聞』②)から御雇外国人ウィリアム・K. バルトンが設計し、工費5.5万円で明治23年10月落成した。

12) 新世界の通天閣(初代)は明治36年開催された第5回内国勸業博覧会の会場跡地に、パリの凱旋門の上にエッフェル塔の上半分を乗せるという設計者設楽貞雄の奇抜な発想で、明治45年7月にルナパークと共に建設された。(読売新聞大阪本社社会部編『通天閣 人と街のものがたり』新風書房、2002年、p141)

13) 野崎…野崎左文『日本名勝地誌 第一編』博文館、明治34年、p99

14)16)『王子電気軌道三十年史』昭和15年、p159

15)17)『新修北区史』昭和46年、p217~218

式の地名とした。和歌山藩主から將軍職についた八代吉宗は王子に鷹狩に来て一帯の紀州由来の懐かしい地名群に痛く感激、「王子権現を中心に、江戸市民のために観光地としよう」¹⁷⁾と考へ、旗本の知行地を取り上げ王子権現の別当金輪寺に寄進、飛鳥山を庶民が花見を楽しむことができる近郊行楽地として広く開放した。

模倣されたホンモノ側と模倣したニセモノ側とを比較すると、概ね模倣されたのは文学に登場したり、歴史上の逸話も豊富な文化的先進地域に所在していることが多い。例えば銀座、有楽町、代々木など東京の地名が多く模倣された山口県周南市(旧徳山市)の戦後の区画整理事業における「町名地番整理委員会」メンバーに「東京への憧れもあった」¹⁸⁾とされるように、先進地域への文化的憧れの発露として、こうした模倣行為が古来続出したと考えられる。もっとも、当時の先進地域内に所在する模倣地名として京都の新熊野、「関西の身延山」(左京区妙傳寺)、大阪府の摂津耶馬溪、兵庫県須磨の新吉野¹⁹⁾、「関西身延」(能勢妙見山)、滋賀県湖西の近江舞子、マイアミ、湖南アルプス、小江戸(彦根)など例外も多く存在するが、奈良県桜井市の多武峰神社を「西の日光」²⁰⁾と呼ぶ俗説には異論もある。

さらに鉄道交通が主流となる明治後期以降、私鉄を含む観光企業が主体的に模倣的な各種観光施設を建設する事例が多数続出した。比較的安

易に設営可能で、気軽に命名したと思われる個人・組合形態の海水浴場などに模倣例が散見される。

明治末「鉄道院に在て、常に旅行に関する事務を執りつつ傍ら種々な研究をして居た」²¹⁾旅行のプロ・森永規六は「日本三景も大分古臭いと云ふ人もあらうが、腐っても鯛は矢張り鯛である。新和歌浦が佳いとか新舞子が宜いとか云ふが、名所の新しい字の付く所にロクな所はない」²²⁾と、当時台頭しつつあった新興勢力の模倣観光地を容赦なく酷評している。鉄道界・観光業界に通暁して、裏事情にも明るい森永の現状追従でない指摘には、今日の観光社会学の批判的精神にも一脈相通ずる鋭いものが感じられる。

III 模倣を推進した企業・人物

単純な模倣にとどまらず、営利的な動機から本格的にある種の「ニセモノ」を意図的に作り出して、世の中に発信した首謀者・建設主体として企業・個人等が具体的に判明する事例を、以下に森永の指摘例を含めて数例紹介することとする。

① 仮終点の「新温泉」で一時凌ぎの宝塚

小林一三は本来の鉄道目的地である天然温泉の有馬に代わる、取り敢えずの代替財として仮終点に沸かし湯の「疑似温泉」を宝塚「旧」温泉の対岸に宝塚「新」温泉と銘打って建設した。あまりに著名な周知の事例であり、詳細は別の機会²³⁾に譲る。

18) 「地図の雑学事典」205 地方に広がる東京名所：「地図豆」(s.webry.info/sp/kaempfer.at.webry.info/201404/article_32.html)

19) 「時の<須磨寺>住職之れが維持策として二十余年前から始めて荒蕪地を拓き数千株の桜樹を移植せしに、今や既に桜の名所…」(森永規六編『兵庫電気軌道沿線案内』大正6年, p24)

20) 多武峰神社側では徳川家康の死後、遺言により二代將軍・秀忠がこの神社の本殿を手本として日光東照宮を造営した史実から本当は日光の東照宮を「東の多武峰」と呼ぶべきと反論している。

21) 森永規六『趣味の名所案内』大鑑閣、大正6年, p1

22) 森永前掲書, p212

23) 平成27年6月6日企業家研究フォーラム「小林一三のデザインした観光ビジネスモデル-阪急宝塚の「真正性」と「垂流」温泉・遊園・歌劇群-」

②「紀州の新勝地」新和歌浦

和歌山県多額納税者・森田庄兵衛は明治38年病氣療養のため和歌浦に転地した際、「一帯が天下の勝地であるに拘らず其儘顧られないのを遺憾として」²⁴⁾、和歌浦雑賀崎周辺の山野45町歩を買収し44年から出島～田の浦の道路、望海楼等の旅館兼料亭の建設と業者への貸与、水道敷設等の開発に着手した。森田は「新たに開発された勝地」²⁵⁾を昔からの「古典的の和歌浦」²⁶⁾と区別して「饒かな近代的新味を加へた新和歌浦」²⁷⁾と呼び、大正6年新和歌浦土地株式会社を創立して自ら社長となり、個人所有の山林、諸施設一切を譲渡した。8年には会社直営の旅館仙集館と「宏大なる人造滝を設け」²⁸⁾た付属山上庭園、美術館等を開業、第3期の開発として索道架設、道路の延長を計画した。和歌浦の旅館主・中尾文三は「森田氏が新和歌浦を開拓したる際率先して」²⁹⁾望海楼を新たに経営するなど、浜口弥は古来の和歌浦と「紀州の新勝地」³⁰⁾新和歌浦とが「相寄って一の勝地を、成して居る」³¹⁾と一体視した。安治博道は「新和歌浦は明治四十四年森田庄兵衛氏が開拓せる所にて風光明媚なる事和歌浦に優る…第二トンネルの入口に新和歌浦土地株式会社直営の旅館仙集館、及び望海楼、米栄別荘、あしべや等あり…之より鷹の巢の絶景に至るべく、尚蛸頭子山頂に通ずるケーブルカーは架設中にあり」³²⁾と和歌浦より高評価した。しかし同様にリス

ク管理を十分に意識すべき銀行家出身で“新”施設を旧施設に隣接して開発し、今太閤と称えられた小林一三のその後の栄達の軌跡と比べて、森田の零落ぶり³³⁾は痛々しい。

③「東北ノ宝塚」松島遊園を開園、野蒜を「東北須磨」と改称

手島典男氏が宮城電気鉄道(宮電)出身者から聴取されたところでは、「阪急の創始者、財界の大御所小林一三氏や、東武の根津嘉一郎氏が屢々来仙され指導」³⁴⁾を仰いだ結果、「松島海岸に劇場を造って宝塚からスターを呼び、野蒜は東北須磨と名づけ」³⁵⁾たという。仙台、松島を経て石巻に達する宮電は昭和2年沿線に「観光客の慰安、娯楽等に就て設備の見るべきものなきを以て、遊園設備の必要を認め」³⁶⁾、「小林一三流の商法」³⁷⁾を見習い、「東北ノ宝塚」松島遊園・松島劇場を開園した。宮電発行の松島遊園案内には「東北ノ宝塚、松島遊園ハ本社ノ経営ニシテ、劇場、食堂、貸切別館、浴場、人形館、児童遊戯場、売店等ノ設備アリ。劇場ハ椅子席、観客一千名ヲ収容シ得ラレ、五彩ノ照明ハ特ニ誇ルニ足ル。常設活動写真館ナルモ時折東都一流歌劇、歌舞伎ヲ招シテ特別興行ヲナス…各館共、浴室付御家族同伴一日ノ清遊ニ適シ、実ニ東北一ノ極楽境タリ」³⁸⁾と自画自賛する。松島以外でも沿線開発の一環として野蒜に「本社直営東北一、野蒜不老山海水浴場」³⁹⁾と直営長寿館を建設した。野蒜海岸を須磨

24) 浜口弥「名所案内・和歌浦と新和歌浦」大正8年7月、p7

25)26)27)28)31) 浜口前掲書、p1~2

29)30) 浜口前掲書、p15~17

32)「全国鉄道旅行案内」大正11年3月、p159~160

33) 森田家の末路について平松憲夫(阪和電気鉄道取締役)は「時利あらず、人に運なしか、忽ち大蹉跌を来してしまつたが、時を経、日を過ぎて遂に今日の殷賑新和歌が出来上つた。…ここに哀れを止めたのは独り森田家である。近く同家を知るもの、此の開拓者のため像を永久に記念せんと議しつある」(昭和12年2月28日月刊誌『阪和ニュース』、平松憲夫『阪和百景』昭和14年、p23所収)と森田の功績を称えた。森

田庄兵衛は田中修司「森田庄兵衛による新和歌浦観光開発について」『日本建築学会計画系論文集』635号、社団法人日本建築学会、平成21年1月、p291~7。

34)35) 手島典男「下りやまびこ」昭和58年、p22

36) 東京市政調査会「本邦地方鉄道事業ニ関スル調査」昭和7年、p172~173

37) 手島前掲書、p14

38) 『宮城電気鉄道株式会社 沿線案内』大正14年6月以降、宮城電気鉄道発行

39) 『宮城電鉄案内』(東北須磨改称前発行)

に見立て野蒜駅を「東北須磨」と改称して奥松島の景観を宣伝、「東北須磨南〇・三軒、駅前松林中ニ当社経営ノ長寿館アリ…此ノ海原一帯会社直営ノ海水浴場ニシテ、プール、売店、休憩所等万般ノ設備整ヒ東北一ノ海水浴場ナリ」⁴⁰⁾と観光客誘致を目指した⁴¹⁾。「東北須磨」との異例の命名も「東北一」の標語を好む宮電社長山本豊次⁴²⁾らの強い意向を反映したように感じられる。

①の小林一三(阪急)と、②の森田庄兵衛とは隣接ないしほぼ近接する既存の観光地の名称を借用して、接頭語としての「新」を追加する模倣方式であり、模倣行為にある種の合理性、説得性、必然性、住民の合意性が認められる。(小林の場合、事前に旧温泉側への共同出資を呼び掛けてからの新温泉の着手であった。)同種の系譜として旧軽井沢に対する新軽井沢があり、さらに亜流ともいうべき南軽井沢、北軽井沢、西軽井沢…と、県境を越えてまで軽井沢エリアが無限に拡大し続ける事例⁴³⁾が有名である。

これに対して、③の山本豊次などの事例は、県境を越えるどころか、遙か遠方にまで「飛び火」した模倣方式であり、当地の風光が彼の地に幾分か似通った点がある点を除けば、牽強付会のような印象を与えかねない。訪れる観光客には命名のもっともらしい根拠を、地元住民には旧地名を放棄する必然性を示す必要があった。「東北須磨」などの無理な駅名は定着せず、いつしか本来の

「野蒜」に戻るなど、住民の合意性が薄弱な模倣地名は消滅することとなった。

IV 知多の模倣ゾーン

「須磨、舞子、明石 誰れ知らぬものもない天下の名所で、孰れも淡路島を眼前に控へて朝暉夕陰の景色は実に筆紙に尽し難い」⁴⁴⁾と評された古来の海浜景勝地のうち、新舞子を名乗る海岸は全国にいわき市、富津市、知多市、たつの市など少なくとも数ヶ所ある。ここでは舞子に加え須磨、明石の全部が揃った模倣集積地たる知多(知多半島・知多湾岸)を典型的な模倣ゾーンの事例として取り上げよう。

①知多の信仰風土

そもそも知多には遠隔地の熊野や四国のパワースポットへの憧憬の気持ちが古来強い土地柄であったと考えられる。知多には11世紀に源頼義が熊野の分霊を請い、造営した碧南熊野神社(碧南市)や、長田白正氏が熊野より勧請した大浜熊野大神社(碧南市)など古来熊野信仰が盛んであった。弘法大師の霊場でも「尾張三河地方の信仰の力は恐いもの」⁴⁵⁾があり、近世に妙楽寺住職が発願し、四国霊場にならって開創した「新四国八十八ヶ所霊場」は小豆島、篠栗(福岡県)とともに日本三大新四国霊場に数えられる存在で、現在も名鉄⁴⁶⁾等のツアーが盛んに行われている。なお

40)『宮城電鉄沿線案内』早坂印刷、昭和14年頃

41)「特別名勝松島保存管理計画」宮城県(www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/16124.pdf)

42)山本豊次は山口県豊浦の出身、明治39年東大理学部卒、化学技術者として中国で教育研究に従事した後、明治45年7月高田商會が所有する高田鉦山(細倉鉦山)の所長となり、高田商會大寺精錬所、栗原軌道に関与する一方、抱え込んだ大量の余剰電力を消化するため、大正11年宮城電気鉄道設立にも深く関わり、宮電の経営多角化を推進した。省線との競争ぶりは平山昇「社寺参詣と鉄道-東北の事例から-」老川慶喜ほか『鉄道がつくった日本の近代』成山堂書店、平成26年、p264 以下参照。

43)「以前は軽井沢といえば、ここ<旧軽井沢宿>のことで…その後別荘地が西へのびるにしたがって軽井沢の名称に含まれる地域が広がった」(軽井沢文化協会編『軽井沢案内』軽井沢タイムズ社、昭和38年、p12)。拙稿「第二の軽井沢を夢想した“観光デザイナー”松本隆治と宮崎寛愛-観光リスクマネジメントの観点から-」『彦根論叢』第399号、平成26年3月参照。

44) 森永前掲書、p105

45)『愛知電鉄沿線案内』愛知電気鉄道、昭和4年。

46)「歩いて巡拝知多四国/名鉄のオススメ/名古屋鉄道」(www.meitetsu.co.jp/recommend/hiking/pilgrimage)参照。

札所の一つ時志観音には大和の信貴山毘沙門天も勧請された⁴⁷⁾。

②知多半島・知多湾岸の海水浴場

知多周辺の海水浴場は愛知電気鉄道(愛電)の開通を機に、名古屋からの遊客を当て込んで旧地名に代え、著名な兵庫県の地名にあやかり命名した海水浴場が続出した。まず我が国最古級といわれる大野海水浴場は明治14年海音寺住職が海水浴場と加温浴場とを開き、水質も清良であるため⁴⁸⁾「古来より海水浴の名ありし處にして明治十五年以降益繁榮なり大磯と比肩する程」⁴⁹⁾とされた。14年から愛知病院長として勤務していた後藤新平が当地の風習「潮湯治」と西洋の海水浴を融合し大野に最初の海水浴場を開いたとされる⁵⁰⁾。著名な旅館は海浜館、恩波楼等であり、「海浜館は、大野川河口の右岸海に斗出せる地を卜して三層の高樓を建設し、其海浜を以て水浴場に充て館内別に温浴の設けあり」⁵¹⁾とされた。愛電は大野の加温浴場を地元から引き継ぎ⁵²⁾、明治45年二階建ての温浴場(千鳥温泉)を開設、大正5年新聞社と提携、納涼棧橋、人造海水大滝、児童海水プール、潮湯(千鳥温泉)などを設けた⁵³⁾。

③新舞子土地会社

大野浜に続く知多郡旭村下松原(現知多市新舞子)に舞子を模した海浜リゾートを土地会社が

建設した。新舞子は「風光明媚な勝地で、兵庫県の舞子の浜を思わせる老松白砂の海浜が、新舞子と名乗る所以」⁵⁴⁾で、三輪喜兵衛、手塚辰次郎⁵⁵⁾らは愛電常滑線が新舞子、大野海岸まで開通するのを機に明治45年新舞子土地株式会社(資本金100万円)を設立、「市の急劇なる発展…或は郊外に電鉄の延長…が為め従来草叢の蔓るに任せし郊外の地所の忽ち奔騰して一坪十円或は二十円を唱え」⁵⁶⁾る地所熱の中、大遊園地を造成する計画のもとに御料局から75,600㎡の土地払い下げを受けたが、地域住民の反発を受け、「社長三輪喜兵衛氏は字民を招待し感情を融和せんと計りしも、之が為め却つて氣勢を挙げ」⁵⁷⁾るなど御料林処分をめぐる紛議が発生した。

明治43年に客室百余部屋を持つ旅館兼料理屋「舞子館」を建てた。舞子館は蒲郡「常盤館」、熱田「南陽館」と共に愛知県下の三大旅館と呼ばれた。愛電も開発に協力、大正2年無料休憩所を設け海水浴場として広く紹介した⁵⁸⁾。

舞子館は「避暑客を吸引することに努力したが、財界の不況其他の事情の為に其発展も思ふやうに出来なかった」⁵⁹⁾ため経営振わず、大正11年7月新舞子を支援していた愛電に合併された。愛電社長藍川清成は新舞子の風光が気に入り、ここに新宅を建て開発の陣頭指揮をとり、新舞子文

47) 81) 宇佐美浩『名古屋鉄道社史』名古屋鉄道、昭和36年、p498

48) 野崎左文『漫遊案内』明治30年7月、p134

49) 林莊太郎『全国鉄道賃金名所旧跡案内』明治27年、p65

50) 中川浩一『観光の文化史』1985年、p142～149

51) 大橋又太郎『旅行案内』『日用百科全書』第14編、博文館、明治29年7月、p151

52) 59) 『大野町史』昭和4年、p303～308

53) 『日本案内記中部編』鉄道省、昭和7年2月、p129

54) 60) 小林橋川『藍川清成』昭和28年、p147～149

55) 手塚辰次郎は熱田の石炭商、三輪喜兵衛は呉服反物商の巨擘、三輪は「何でも大きな物を好み、邸宅の如きも総て大きな…」(手島益雄『名古屋百人人物評論』日本電報通信社名古屋支局、大正4年、p90～91)、「極めて精力家」(『地主名鑑』第1編) p17～18)で、「何事に就ても大を好む…何物を問はず大な物を備へ付け、事業を目論見ば新舞子土地会社の社長となりて、知多郡の片田舎へ行て海水浴場を設備たり、大旅館を建築するが如き事をする」(長江金圭太郎『東京名古屋現代人物誌』大正5年、p192)と評された。手塚辰次郎は水谷盛光『『新舞子』の開発と手塚辰次郎覚書』『郷土文化』35巻1号、名古屋郷土文化会、昭和55年。

56) 中京財界の近状(一) 地所熱の余殃、大正2年11月18日『中外商業新報』

57) 『愛知県史 資料編32 近代』平成14年、p176

化村を完成させた⁶⁰⁾。ここに土地会社主導の模倣地名は定着し、「格好の住宅地帯として多大の賞讃を博して」⁶¹⁾名古屋の別荘地ないし一流の郊外住宅地としての地歩を堅めていった。

④三河鉄道による新須磨

大浜町(現碧南市大浜)は矢作川の河口と衣浦湾が交じりあうことから、「三河五湊」の港町として栄えた。鶴ヶ崎の鈴木徳松⁶²⁾は「少し前、兵庫県を旅し…須磨海岸が近所の海の景色と似ていることをヒントにそれまで貯木場しかなかった海を整備し、海水浴場とするアイデアを思いつきました。そして名前を『新須磨』とし『遠浅で波が穏やか』『白砂青松』を謳い文句にした」⁶³⁾海水浴場を大正3年7月上之切・熊野神社の神苑に開業した。しかし売店「衣浦館」単独の宣伝では限界があり、「眺望絶佳の風致…須磨・明石に似ることから、土地の商店主が新須磨と呼んだことに始まり、三河鉄道専務の命名によって通り名になった」⁶⁴⁾とされる。すなわち、当初の発案者よりも翌大正4年7月海水浴場に臨時駅を開設し「新須磨」と命名して宣伝した三河鉄道(三鉄)側の功績が目立つこととなる。当時の三鉄社長は地元の武山勘七の辞任を受け、アイデアマンの久保扶桑⁶⁵⁾にかわり、専務は阪東宜雄、取締役は神谷伝兵衛らであった。三鉄は「三河鉄道再興の恩人」⁶⁶⁾として出身

地に「神谷」駅を設置するなど、駅名をかなり弾力的に付与する傾向が見られる。昭和30年代前半までは新須磨は海水浴場として賑わっていたが⁶⁷⁾、昭和37年防潮堤建設で新須磨海水浴場が消滅し、昭和40年には新須磨塩水プールも閉鎖、昭和56年に新須磨駅が北側に移設、駅名も碧南中央駅と改名したため新須磨の模倣地名は完全に消えた⁶⁸⁾。

⑤もうひとつの新須磨海水浴場

模倣地名を混乱させる要因として愛知県東南部には三鉄主導の新須磨(現碧南市大浜)とは別に、愛電沿線の大野(現知多市)にも同名の新須磨海水浴場が存在したことが挙げられる。大野の郷土史を研究する「ヨクロー」氏は地図を示して「大野の南に位置する西之口の海岸に、しっかりと新須磨海水浴場と書かれています。以前、新須磨海水浴場は碧南にあった海水浴場ですよというコメントを頂きましたが、確かに、少なくとも大正時代には、大野の南にもその名の海水浴場があった」⁶⁹⁾と別物と指摘する。「大野の北に新舞子があり、大野の南に新須磨があるが、新舞子も新須磨も愛電線が西浦を走るやうになつてから附せられた名称」⁷⁰⁾で、「近來更に大野海岸より南部新須磨(西之口下)方面が既に別荘及海水浴場地帯になりつつある」⁷¹⁾とされ、大正14年発行の大野の案

58)66) 前掲名鉄百年史, p492, p296、伊藤正『社史余話』平成6年、名古屋鉄道, p32, p27

62)68)73) 『新須磨海水浴場』『新明石海水浴場』失われた海を探してトボトボ歩く碧南市(www.katch.ne.jp/~hiro32/atlantis/lost_sea04.htm / lost_sea09.htm)。なお「ビジネスホテル新須磨」に名残がある由。

63) 茶亭「風和里」店主の投稿、2012年10月20日(「町の歴史ホリオコシ隊」owarioono.blog62.fc2.com/blog-entry-69.html 平成27年6月29日検索)。碧南の新須磨海水浴場開設者「衣浦館」の子孫も大野に「もう一つの新須磨があったことに驚いて」いる。

64)67) 『三河を走って85年 保存版写真集』郷土出版社、平成11年, p118。当時の専務は阪東宜雄。

65) 久保扶桑は1851年生まれ、千葉県平民、慶応義塾卒、日本郵船函館支店支配人、明治31年日鉄に入社、運輸課長、営業部副部長、経理部長を歴任、奇抜な発想から「素人建築の奇才」といわれた。三河鉄道は大正2年刈谷から大浜港まで着工したが、株式払込が難航し地元代表の武山勘七社長が辞任、大株主東京渡辺銀行を代表し久保が後任社長に、阪東宜雄が専務に就任した。(名鉄社史, p295) 東京渡辺銀行との因縁は拙著『企業破綻と金融破綻』九大出版会、平成14年, p316～319参照。

69)72) WEBサイト「町の歴史ホリオコシ隊」(owarioono.blog62.fc2.com/blog-entry-69.html 平成27年6月29日検索)

70) 『大野町史』昭和4年, p303

71) 『大野町誌』昭和4年, p308

内書の書名は『新舞子 大野 新須磨 海水浴案内』であり、挿入地図には大野駅の南の西ノ口駅の外宮海岸に新須磨海水浴場が記載されている。しかし前述の三鉄沿線の新須磨が比較的長く存続したのに対し、なぜか愛電沿線の方の新須磨の名は浸透せず、すぐに消えてしまった由である⁷²⁾。名古屋からの海水浴客にも同一の「新須磨」が県南方面に二か所あったのでは混乱を招いたことであろう。

⑥新明石海水浴場

鶴ヶ崎（現碧南市松江町）の加藤志奈松が新川山神社の下の林間に無料休憩所を開設し、やがて鶴ヶ崎区役員ら主導の海水浴場を新たに整備した。大正10年新明石海水浴場と命名し宣伝に努めたとされる⁷³⁾。須磨にちなんだ熊野神社に対抗し、南に位置する鶴ヶ崎は須磨の西に位置する明石を名乗った。大正末期には「新明石遊園」という子供向けの遊園が併設され、戦時期には高台に衣浦温泉街もできた⁷⁴⁾。しかし昭和30年代後半から始まる臨海埋め立てで海岸が消滅、新明石も閉鎖を余儀なくされ、「明石公園」という公園に名をとどめるにすぎない。

⑦新浜寺海水浴場

さらに新須磨と玉津浦の間に昭和初期「新浜寺海水浴場」⁷⁵⁾が新設された。ここに位置し、「海浜に面して風光宜しく海水浴の設備あり」⁷⁶⁾と三河鉄道が推奨していた老舗旅館「海月倶楽部」あたりの肝煎りであろう。

こうして“三巴”“四巴”の模倣地名海水浴場のうち、先発の新舞子は風光明媚で舞子の浜を思わせる基礎条件があり、支援に乗り出した有力私鉄の社長自ら陣頭指揮で文化村を構築した結果、現在も正式地名として定着した。しかし、三河鉄道などの執行役員は地元出身者でなかったり、資本系統の関係から、模倣地名を受容しやすい体質があったのかもしれない。あるいは経営難・資金難の中で、さほど金の掛からぬ改善策として、もっともらしい模倣地名に改称する方策を選択したのかもしれない。その点で鉄道会社の駅名やバス路線名は、地名とは異なり、一応は監督当局の形式的な許可を要するとはいえ、鉄道側の都合にあわせて比較的容易に改変可能な「企業施設名称」にすぎなかったといえる。反面で背景が弱体な新明石、新須磨や新浜寺はやがて忘れ去られた。

名鉄百年史は「海岸線を走行する特徴があったから海水浴客に力を入れ」⁷⁷⁾ざるを得なかった愛電の「沿線は貧弱であり…無謀な事業」⁷⁸⁾と冷静に分析する。他に類例をみないほどの模倣地名の乱立の背景には近隣の海水浴場の成功に触発された地域間の根強い対抗心もうかがえる。愛知県東南部の海岸には上方を擬した模倣地名が集積⁷⁹⁾する理由は愛電・三鉄という複数の私鉄間での激しい海水浴客獲得競争の中で、無名の片田舎を強引に別荘地開発しようと企む土地会社の株主獲得の秘策として編み出された有名ブランドを借用する模倣ビジネスモデルが他の隣接地で

74)『西三河今昔写真集 保存版』樹林舎、平成18年、p86

75)『碧南市史』第2巻、昭和45年、p722

76)『三河鉄道営業案内』三河鉄道、大正3年

77)78)伊藤正『名古屋鉄道百年史』平成6年、p97

79) 昭和7年「知多鉄道が開通し、白砂青松の富貴海岸は海水浴や別荘地として脚光を浴び観光地化への動きが見られた。武豊では建設途中で放棄された朝日キネマ撮影所を利用して『東海の宝塚』にすべく、武豊町長を務めた青木市松や加藤新三郎らが奔走したが、翌年不審火で建物が焼失し断念」（滝川武彦『角川日本姓氏歴史人物大辞典23愛

知県』角川書店、平成3年、p326）した例もあった。このほか周辺では南知多町篠島は変化に富んだ海岸線と湾内に点在する島々の景観から「東海の松島」（篠島観光協会）と、また西尾市佐久島も同様に「東海の松島」と称される。

80) 昭和9年本宿と蒲郡を結ぶ愛知県道38号線が開通し、愛電自動車は鉢地峠から見る「山上の景勝が箱根に似ているところから…新箱根線と名付け」（前掲名鉄社史、p432）9月バスを開業した。昭和15年発行の名鉄『沿線御案内』は新箱根線に初投入した豪華な流線形バスの写真を掲げ、「景勝地へは豊橋線本宿駅から新箱根越の快適なバス…重々層々たる連峰の眺めと、蒲郡風景の鳥瞰とは新箱根のその名

の起業に次々と飛び火したものと解される。その後三鉄・愛電を統合した名鉄の社史を紐解くと、その後も新箱根線⁸⁰⁾の開通(昭和10年)、名古屋信貴山の勧請⁸¹⁾(昭和11年)、成田山名古屋別院の勧請(昭和11年計画、昭和28年建立)などが散見され、計画を推進した企業としてあるいは地域として模倣を受容し易い気風⁸²⁾といったものが潜在していたのかもしれない。大正期の舞子、須磨、明石、浜寺等に代り、昭和初期には新たに箱根や成田が登場したのは、上方地名の魅力が薄れて流行の対象が箱根の関を越える東漸傾向も見とれる。

V | むすびにかえて

観光地名の模倣行為が発生する端緒は、「本物」を旅した新須磨の売店主の例のように、住民や旅行者が単に印象として著名な名勝との類似性を認識し、そうした声の累積が旅行記等への記載、駅名等への採用がきっかけとなっていつしか本物を模倣した名称が成立・定着していくようなストーリーが一般に想定される。近代には現地を訪れた学者、造園家、作家、記者等の印象が活字化されて流布され、模倣行為が発生する例もみられる。現代ではマスコミからネットまでの多様な媒体によって、海外模倣の事例が増殖しており、旧来の模倣地名が駆逐されつつある⁸³⁾。

にふさわしい…本宿、蒲郡間三十分、各急行電車で接続」と大いに宣伝に努め、行楽期には積み残し客が出るほど評判となった。社史にも「第一に指を屈するの観光路線」として写真入りで特記された「新箱根」の名は現在では全く廃れ、観光案内や地図に載ることもなく僅かに交差点名に「新箱根入口」と残っているだけという。

82) 磯村英一は「名古屋人の東京、大阪に対して示す姿勢を『拒否しながら模倣する』ものである」という説を紹介して、「東京と大阪にはさまれて位置し、主として東京を中心とする文化の一体化が進行しつつある現状のなかで、名古屋が文化的独自性を育てるためには、名古屋人がより…名古屋が東京、

上述のように模倣行為の動機としては根底に本物・本家筋への根強い憧憬があるが、近世以前には純粹の信仰心に基づく場合が多く、近代以降には次第に営利的な動機が強まり、遂には先発のビジネスモデルの踏襲に至る。模倣の受容度は地域で差があり、時に模倣が連鎖する。本物を模倣する行為にはある種の後ろめたさが伴うためか、模倣を正当化しようとあれこれ弁解する傾向が散見される。まず①当該地域との隣接・近接性、②景観等の類似性、③勧請など本家筋からの許諾、④本物と同一の部材使用、⑤本家筋との密な因果関係、⑥第三者たる権威者による命名などである。模倣のレベルにも①単なる別称・愛称の初期段階から、②施設の呼称、③社名、④駅名、⑤付近の通称、⑥正式の地名、⑦さらに市町村名にまで昇格する最終段階まで各段階がある。

模倣側と所在地域との相互関係は①地域の総意による模倣⁸⁴⁾、②模倣の是認・定着、③黙認、④不同意、⑤反発、⑥改称・原名への復帰要求など多様である。地域の歴史や文化を軽視した安易な模倣や、根拠が薄弱で無理な模倣の場合、住民の十分な理解が得られず、地名として定着せず、あるいは反発を受け短期間に駅名が本来の地名に戻されたり、根付くことなく消え去り住民の記憶にも残らなくなった場合もみられる。反対に同じく本家を模倣した地名でも模倣行為にある種の合理性、説得性、必然性、住民合意性等の認められる事例では地名として定着する傾向がうかがえる。

大阪のメトロポリスに対応できるだけの文化的メトロポリタンシンボルを持ち得るか否かは、名古屋人の人間形成の上でも、また都市全体の成長のためにも大きな課題である(『日本のメガロポリス: その実態と未来像』1969年、94～95ページ)と名古屋人の模倣性に言及した。

83) 福島県郡山市の浄土松公園きのこ岩は「陸の松島」(郡山市教育委員会)と呼ばれていたが、最近のTV番組で「日本のカップドキア」と紹介され、こちらが定着化しつつある。

84) 近代の新十津川町は明治22年の集中豪雨後、地域コミュニティの総意による団体移住の決断としての町名であった。

一例を挙げればディズニーワールドの所在する米国フロリダ州内のマイアミ浜をもじった外国地名模倣⁸⁵⁾の浦安市舞浜は、①埋立地で元の地名がなく、②米国流遊園地の所在地でもあるためか、和名に改名⁸⁶⁾すべしというような反対の声は寡聞にして知らない。

模倣行為そのものの価値評価はなかなか困難であり、当時その場所に「ニセモノ」が真に必要とされた歴史的背景や「本物」の入手可能性等の諸要因を総合的に斟酌し、公平に比較考量する必要がある。たとえば東北・平泉に根付き、花開いた平泉文化⁸⁷⁾を京の貴族文化を移植しただけの模倣文化であると軽蔑する論者も少なくないが、我々日本人が平泉の自家筋と考える京でさえも、その都市計画は当時の中国の模倣であることを否定し難い。

観光現象を人々の「真正性」追及のための純粹の宗教的行為の如く狭く解し、観光目的を「真正性」あるものみに厳格に絞り込むべきと解する極端な原理主義者にとっては模倣はいずれも「真正性」を欠く存在として徹底的に排斥すべきものとなる。その結果、平泉も、京都でさえも「真正性」なき模倣にすぎず観光する価値なきものになり、

観光すべき対象を自ら削除していく結果、世界中で四大文明の源流さえ見れば事足りるとの結論となる。まして筆者の列挙した日本国内に無数に存在する模倣観光地など一顧の価値なき無用の存在ということにもなりかねない。

しかし筆者は前々稿⁸⁸⁾の近世、本稿の近・現代などの日本人の観光現象の分析結果から考えて、観光目的を「真正性」のみに絞り込むのは実情からかけ離れた議論のように感じられる。近世の見世物小屋が常設化、集結した進化形たる明治期以降現代に至る各種遊園地には多様な「ニセモノ」、「張りボテ」「ミニチュア」の類が敷地内の各所に所狭しと集結し、利用客はあたかも「本物」の「国内旅行」「外国旅行」時には「宇宙旅行」等の疑似体験をお手軽に楽しんで現在に至っているのである。米国まで遠路の海外旅行が叶わぬ庶民救済のために建設した前稿⁸⁹⁾の奈良ドリームランドも、こうした延長線上に位置していたものと考えられる。近代でも遠隔地の名高い「本物」よりも手軽な「ニセモノ」を近場で安価に楽しむ代替需要が底堅く存在し、着実に利用され庶民層に好意的に受容されていたことを本稿でも幾つかの事例で明らかにした。

85) 浦安市は漁民の総意で漁業権を放棄し、漁業に代わる主力産業を遊園地と思い定めた住民自身の決断の反映であり、米国から自家パークを勧請した行為にはそれなりの必然性が感じられる。同様に京浜急行は昭和41年の路線延長を機に野比から三浦海岸一帯を同じくフロリダ州の有名海浜リゾート地に見立て、「東洋のデートナ・ビーチ」と呼ぶ海水浴場の一大キャンペーンを展開したが、バブル崩壊後の定着具合はいかがなものであろうか。

86) JR先輩諸駅を見習えば、京葉線流に「海浜浦安」「浦安浜」「浦安海岸」、武蔵野線流に「西浦安」、常磐線流に「浦安沖」などか。

87) 藤島亥治郎『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』1961年、p10。藤島氏は「平泉文化を単なる模倣文化としていやしめたり、あるいはひなにはまれな珍奇をよろこぶ程度の評価を、きびしくこぼむ。平泉文化は、広い日本文化の歴史の場で、その存在理由が正面から問われなければならない種類の文化なのである」(同書、p201)と主張している。

88) 前々稿は注6参照。

89) 前稿・拙稿「遊園地における虚構性の研究—観光社会学からみた奈良ドリームランドの「本物」「ニセモノ」論—」『彦根論叢』第404号、平成27年6月

現在は銀座や有楽町の地名が盛んに模倣される側に回っている東京も江戸初期には比叡山を模した東叡山(寛永寺)や琵琶湖を模した不忍池などを擁する上野地区などに象徴されるように、京滋の「本物」に憧れて模倣する「ニセモノ」側の一員であった。したがって「本物」を求める旅行者はすべからずJRのCMではないが、本家筋の京都を目指すべきものであろうが、観光社会学を極めるべく「本物」「ニセモノ」の境界を追い求める筆者は平成27年6月東京を出発して「本物」に取り囲まれた京都の中であえて「ニセモノ」を探索した。早朝嵐電に乗り、世界遺産仁和寺の荘厳な堂宇を足早に通り返けて裏山の成就山に向った。ここには旅の目的地たる四国八十八ヶ所霊場を模した「写し霊場」×「縮景」の「御室八十八ヶ所霊場」が現存する。四国への巡拝が困難であった文政10年、仁和寺29世門跡の御本願により四国八十八ヶ所霊場のお砂を持ち帰り、裏山に埋めてお堂を建てたのが2時間で参拝出来る手頃な巡拝コースの由来⁹⁰⁾である。京都徳島県人会が建立した「是より阿波の國 発心の道場」の石碑に導かれて第一番札所から四国各地を巡る心地で参拝を試みると、健康法として毎朝登山を楽しむ

ような元気な年配者と多く遭遇した。古都の「本物」の社寺に囲まれた中の「ニセモノ」ながら、信者はもちろん毎朝登山者や四国出身者など結構多くのリピーターを集め、なかなかの盛況とお見受けした。参詣する人々は「本物」の八十八ヶ所と騙されているわけではなく「ニセモノ」と知りつつ、恰も四国霊場を巡礼しているような清々しい気分で非日常世界を楽しんでいる訳である。いわば仁和寺門跡が四国まで遠路の巡礼が叶わぬ庶民救済のために建設した四国を主題とした江戸時代の「テーマパーク」が今なお賑々と活用されている。本家の四国側から「ニセモノ」だとして抗議を受けるところか、度々は帰郷できぬ四国出身者の望郷の念を満たす場所としての効用も現にあるようだ。営利目的の開発業者などの手によるのではなく、宗教的権威ある総本山自身が世界遺産の境内に隣接して堂々と「ニセモノ」を建立し、信者に参拝を呼び掛けている御室こそ「本物」と「ニセモノ」が対立することなく、共生・共存し、共に役割を發揮し続ける姿を象徴するものであろう。

90) 御室八十八ヶ所霊場 | 世界遺産 総本山仁和寺 (www.ninnaji.or.jp/hallowed_ground.html)。境内に同様なミニ霊場がある富山県南砺市の安居寺の他にも岡山県笠岡の沖にある神島の月照山日光寺の「寺内には『神島八十八ヶ所霊場』がある」(吉田初三郎『南備名所御案内』観光社、昭和5年)との例や、千葉県勝浦の仏国寺の百体観音など多数ある。本場の四国霊場でさえも「全部に参詣せんとすれば…余程の健脚者でも四十日を要する」(『阿波鉄道』昭和6年)ため、短縮版の「八十八ヶ所巡拝の代参」、すなわち一番から十番までを「四国霊場十ヶ所巡り」と称して「一日にて霊場札所十ヶ処を巡拝せる旅客非常に増加」(『阿波鉄道沿線案内』大正15年)した。

The Study of Fictitiousness in Resorts

True-False Discussions of Resorts

from a Tourism-Sociological Viewpoint

Isao Ogawa

For fundamentalists who believe that tourism is a religious act in pursuit of authenticity, and that tourist destinations should be limited only to authentic places, all imitations with no hint of authenticity should be cast aside. They view most tourism resources as valueless copies of others, cross out one spot after another, and conclude that the only places in the world worth visiting are sites associated with the cradle of civilization. Judging from analyses of tourism in Japan from the early to late modern periods, however, I feel that narrowing down the purpose of tourism to authenticity alone is unrealistic. Amusement parks that emerged in and after the Meiji period of modernization (1868–1912), for instance, were in fact evolved versions of freak show huts from the early modern period, gathering a variety of imitations that offered visitors the fun, simulated experience of going on a real trip. Another typical example is Nara Dreamland, which was built for people who could not afford to travel far across the sea to the United States. With demand lasting into the late modern period for cheap “false” destinations closer to home as a substitute for “true” ones far away, this paper sheds light on examples of imitations that borrow names from famous scenic sites and are received favorably by the public.

In some instances, the copying of tourist destination names begins when residents and travelers recognize similarities between a famil-

iar place and a famous scenic site. The image grows until the copied name is written in a travel journal or used as a station name, and in the end the name takes root. In other instances, copying occurs when a scholar, landscape architect, writer, or journalist’s impressions of a place are printed and circulated. In this day and age, these conventional scenarios are overshadowed by channels ranging from the mass media to the Internet giving rise to the emulation of overseas place names. The motivation for copying is a strong admiration for the original and the originator. But whereas up to the early modern period this motivation was based on pure faith, beyond the late modern period it changed to the pursuit of commercial profit, and eventually to following successful business models. How well a copied place name is received varies by region. Sometimes, one case of copying can provoke a chain reaction. The names of many beaches around the Chita Peninsula in Aichi Prefecture, for example, are copies of other place names.

Imitation entails some sense of guilt, and copiers often end up making excuses to justify the act. Some examples of excuse are proximity to and closeness with the original place, similarity between landscapes, permission from the originator, use of the same material as the original, friendly relations with the originator, and naming by a third party of authority. There are also different levels of copying, starting with a

simple appellative or a nickname, going on to the common name of a facility, company, station, or neighborhood, then to official place name, and culminating in the formal name of a municipality.

The relationship between copier and community varies as well. Imitation can be agreed upon by all, or endorsed and established; met with silent approval, disagreement, or objection; or face requests for renaming or a return to the former name. Cheap copies that belittle the area's history and culture or are based on poor reasoning tend to be unsuccessful at gaining understanding from the residents and fail to take root. Some station names are soon restored to their original place names because of opposition, and other names disappear from the residents' memory altogether. On the contrary, imitations that are to some degree rational or win the residents' approval tend to endure. One example is Maihama, the home of Tokyo Disneyland in Urayasu City, Chiba, which derives from Miami Beach, Florida, home to Disneyworld. Thanks to the absence of a previous name – Maihama is built on reclaimed land – and the presence of an American amusement park, very few opposed to the imitation of a foreign place name.

Evaluating emulation is difficult, since a thing cannot be disregarded simply because it is “false.” The Hiraizumi culture that took root and blossomed in the Tohoku region, for ex-

ample, is looked down on by quite a number of scholars who see it as a mere transplant of the aristocratic culture of Kyoto. And even Kyoto, which we Japanese regard as the origin of Hiraizumi, is an imitation of China in terms of city planning.

Tokyo is the originator of a great number of place names copied everywhere today, such as Ginza. But in the early premodern Edo period (1603–1868), this Tokyo was yet another copier that admired and imitated originals from the Kyoto-Ohmi area, like Mt. Hiei and Lake Biwa. Kyoto itself, although home to an ample number of authentic temples and shrines, has its share of imitation: the Omuro Pilgrimage of 88 Temples, a miniature version of the Shikoku Pilgrimage of 88 Temples. This was created by the religious leader of Ninnaji Temple in the Edo period, when traveling to the remote island of Shikoku was difficult. He brought sand from all 88 temples in Shikoku, buried it in the mountain in Kyoto, built 88 halls, and completed a “theme park” where people could make a pilgrimage in just two hours. Since the route in Kyoto served to ease the homesickness of immigrants from Shikoku, there were virtually no protests from originator about the imitation. Even today, people who visit Ninnaji every morning know the place is “false,” but they enjoy the remarkable mini course and feel as refreshed as if they undertook a “true” journey in Shikoku. The Omuro site may be an

imitation, but it is not the work of commercial developers. It was built openly by an authentic religious figure in temple grounds now designated a World Heritage site, calling out for worshippers to come. This represents “true” and “false” coexisting without conflict, where both “original” and “imitation” continue to play a significant role in their own right.

